

移乎佐岐太多尼

渡
部
和
雄

—

東歌三三五三に、

あらたまの伎倍の林に汝を立てて行きかつましじ移乎佐岐太多尼
という歌がある。この第五句について、

『大系 万葉集』 先に寝て下さい。

と、ここでは〈眠る〉方をいつている。

『校注 東歌・防人歌』では、訳文を、
眠を先立たね

として、頭注に「共寝を別れに先き立たせてほしい。まず一緒に寝ておくれ。」という。

『全訳注』　まず共寝をしようよ。

『角川文庫 万葉集』　何はさておき、寝ることを先立てよう。

『全集』では「寝を先立たね」と訓んで、「先立ツは、ある事を他の事よりも先にする意。」まず一緒に寝ようとする。

『集成』　（素通りなんかとてもできそうにない）何はにおいても、寝ること、そいつを先立てよう。

これらに對して、

『全注』の〔考〕部「寝を先立たね」では、

“この結句を「先ず一緒に寝ておくれ」「先に寝て下さい」のいずれに解しても一首がどういふ場合の歌なのかどうもはつきりしない。”

という。そして、

“對して古典集成は「素通りなんかできそうにない」である。これならわかる。男は旅などに出るのではない。妻も伎倍の林まで夫を送つて来たのではない。伎倍の林に女がいた。男はそのまま通り過ぎることができなかった。何はともあれ一緒に寝ようと思い、それを女に言つた。”

と考える。「こう考えれば一応は納得いく。」という。

しかしこれでも、人間が正気で話す文脈というものにはならないだろう。

《共寝》などということの環境というか雰囲気については古代東国人の方が平成の学者などよりはよく知っていただろう。それは近代的なものの裏側の精微さであつて、《共寝を別れに先立たせる》などという説明よりは、ずっと以前の承知なのであろう。

日本では文学というテキストも、したがってそれへの文学論も、まだ言葉の〈文脈〉になったことがないのではないか。

アウグスチヌスは三五四四年十一月十三日に生まれたという。これは仁徳天皇四十二年というのに当る。『告白』は四〇〇年頃。

アウグスチヌスの方が人間の言葉の文脈では大分まさっているのではないか。

たとえば体育大会などというものが行われて、そこに聖火というものが添加される。しかし〈聖なるもの〉と体育というのは、無限の対極にあるものなのではないか。

二

〈寝を先立たね〉という表現についてみると、古事記の

毛々那賀尔 伊波那佐牟遠

について西宮一民氏は〈寝 寐〉と訓まれ、

毛々那賀迹 伊遠斯那世

を〈寝 寐〉と訓まれている。

『記紀歌謠全註解』（相磯貞三）に

寝は寝さむを―御寝みになりましたものをの意。「寝」は、睡眠という意の名詞。「寝さ」は、動詞「寝」が更にサ行四段に活用して敬語となったもの。

とある。

即ち、「い」（眠・寝）―「なす」（寝）は關係的に〈いはなす〉〈いをなす〉という風に表現されているのである。

「いは」という副助詞、主格風と

「いを」という連用修飾格

の關係は後々面白いが、さし当り〈寝を寝〉の關係表現を基礎として考えると「寝を先立たね」という表現は大変稀なものになるう。

万葉集では、

四六 寝毛宿良目八方

四八五 寝宿難尔登

六三九 寝不所宿家礼

一七八七 五十母不宿二

一七八八 寝不宿恋流

二五五六 寝者不眠友

二二二六 寝不所宿

二五九三 宿不所寝

二六五四 寝不宿

二八四四 寝之不寝

三〇九二 寝宿金鶴

三二六九 宿毛寝金手寸

三二七七 眠不睡

三二九七 眠不睡尔

また「公常不宿」（いねずて）、「宿不勝苦者」（いねかてなくは）などは「宿」だけを（いね）と訓んで、一語意識とみられる。

音仮字では、

三六七七 伊能祢良延奴尔

三三八〇 伊能年良延奴尔

三三八四 伊能祢良要奴毛

三九六九 伊母祢受尔

四四〇〇 伊乎祢受乎礼婆

〈ヤスイ〉

八〇二 夜周伊斯奈佐農

三一五七 安寝毛不宿尔

三六三三 夜須伊毛祢受豆

三七七一 夜須伊毛祢受豆

四一七七 安寝不令宿

四一七九 安宿勿令寝

〈ウマイ〉

二三六九 味宿不寐

二九六三 味宿者不寝哉

三二七四 味眠不睡而

などとみられるように、〈イ〉は〈ネ〉と共存、〈宿と寝〉との関係としてある。また、

一九四九 朝宿疑將寐

のような表現として存在している。

一方、東歌というのは、ほとんど〈ネ音〉の歌なのであるが、〈イ〉が使われることはない。

三三七〇 比母登可受祢牟

三三八八 為祢豆夜良佐祢

三三九五 万多祢天武可聞

三三九六 左祢射良奈久尔

三四〇四 (奴礼杼安加奴乎)

三四一四 佐祢乎佐祢豆婆

三四四二 夜麻尔可祢牟毛

三四六一 佐宿尔安波奈久尔

三四六五 (奴流我倍尔)

三四六六 (奴礼婆許登尔豆) 佐祢奈敝波

- 三四七一 祢都追母安良牟乎
三四七三 祢毛等可兒呂賀
三四八七 宿莫奈那里尔思
三四八九 左祢度波良布母
三四九〇 須惠波余里祢牟
三四九四 宿毛等和波毛布
三四九七 左宿佐寐豆許曾
三四九九 祢呂等敝奈香母
三五〇〇 祢乎遠敝奈久尔
三五〇四 (左奴流夜曾奈伎)
三五〇五 (弧悲天香眠良武)
三五〇九 宿奈敝杼母
三五一八 伊射祢之壳刀良
三五二二 兒呂等左宿之香
三五二五 伊麻太宿奈布母
三五二九 祢奈敝古由惠尔
三五四三 伊未太年那久尔
三五四四 左宿而久也思母

三五四五 為祢弓己麻思乎

三五五〇 伎曾比登里宿而

三五五三 伊里豆祢麻久母

三五五四 伊里豆祢末久母

三五五五 宿莫敝児由惠尔

三五五六 左宿都礼婆

三五六二 比登里夜宿良牟

三五六五 宿受夜奈里奈牟

三五七七 曾我比尔宿思久

防人歌では、

四三二一 加曳我牟多祢牟

四三四八 夜須久祢牟加母

四三五一 伊努礼等母

イノレ（いぬる）は一語表現か。東歌に「さぬる夜ぞなき」という表現がある。

四三九四 佐尼加和多良牟

四四一六 麻流祢世婆―比毛等加受祢牟

四四二〇 多妣乃麻流祢乃

四四二二 阿也尔加母祢毛

などとみられ、ネ音は用字も「柎」一つで示される。東歌には外に、

三四六八 伊利伎弓奈左柎

があるが、〈イヲナス〉の表現は見られない。

このように東国歌では〈いーぬ〉の關係意識が強くはみられない。寝（ネ音）の文字性の強い東国歌では〈いーぬ〉のまとまりは、その表現に制限をたらしかねなかつた。〈ネ音〉だけの方が、イメージにも表現にも便利だったのでないか。

たとえば並んだ三首の東歌を挙げてみる。

三四九八 海原の根夜波良古須気あまたあれば君は忘らす我忘るれや
の「根柔小菅」は〈根柔〉であつたり〈寝柔〉であつたりするだろう。

三四九九 岡に寄せ我が刈る草のさね草のまこと柔は寝ろとへなかも
で、「佐柎加夜能」は〈寝草〉であり、〈柔草〉である。

三五〇〇 紫は根をかも竟ふる人の児の心愛しけを寝を竟へなくに
では「根」と「寝」は相關的に意識されている。

山の嶺（ネ）にしても同様である。

三五一二 一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の寄そり妻はも
にみられる「柎」音は、嶺であつたり、寝であつたりする。

イ音を使つては東歌の構成が難しい世界である。

三

「移（い・寝）を先立たね」の「移」字使用は珍らしい。卷十八、

教諭史生尾張少昨歌一首 并短歌

四一〇六 波奈礼居豆 奈介可須移母我

比毛能緒能 移都我利安比豆

橘歌一首 并短歌

四一一二 移夜時自久尔

庭中花作歌一首 并短歌

四一一三 末呂宿乎須礼波 移夫勢美等

開花乎 移豆見流其等尔

と、大伴家持の歌に使用されている。

で、例えば「移豆見流其等尔（いでみるごとに）」にしても、それまでは、

三九五七 伊泥多知奈良之

三九七二 伊泥多々武

三九九三 伊泥多知美礼婆

三九九五 美知尔伊泥多知

四〇〇六 伊泥多知豆

というように「伊」字を使ってきたのである。

「移都我利安比豆」という珍らしい表現は、

一七六七 伊都我里座者（いつがり居れば）と見られる。

「移母」という表記もここだけである。

「移夜」も同様。

「移夫勢美」も同様。

さてその珍らしい「移ーいをー寝を先立たね」として、〈先立〉には次のような用例がみられる。

問答歌

三一一一 為便毛無片恋乎為登比日尔吾可死者夢所見哉

三一一二 夢見而衣乎取服裝束間尔妹之使曾先尔来（さきだちにける）

〈妹が使いが先立った。〉 夕・四

喩族歌一首 并短歌

四四六五 ……於保久米能麻須良多祁乎々佐吉尔多豆（さきにたて）

〈ますらたけをを先に立てて〉 夕・下二

という具合で、これによってみると、

〈寝が先立つ〉

〈寝を先に立てる〉

の二様が考えられる。

古事記中巻に、

加都賀都母伊夜佐岐陀豆流延袁斯麻加牟

とあつて、ここは「知伊須氣余理比売立於最前」という状態だから、伊須氣余理比売が先頭にいることが知れる。対して、

於保久米能麻須良多祁乎々佐吉尔多豆

は、ますら健男を先頭に立てて、であらう。

としたら、「寝を先立たね」は「寝を先立てね」ではないか。

ところがまた次の様な表現がある。

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

三八 ……上瀬尔鵜川乎立 〈ウカハヲタチ〉とよまれている。

見潜鷗人作歌一首

四〇二三 ……夜蘇登毛乃乎波宇加波多知家里

は右と似た表現で〈ウカハタチケリ〉。

遊覽布勢水海賦一首 并短歌

三九九一 ……伎欲吉勢其等尔宇加波多知

は〈キヨキセゴトニ ウカハタチ〉である。

贈水鳥越前判官大伴宿祢池主歌一首 并短歌

四一九〇 ……和我勢故波宇可波多々佐祢

は〈ワガセコハウカハタタサネ〉。タツ十尊敬ス。

四一九一 鷗河立取左牟安由能

は〈ウカハタチ〉とよむのである。

で、全体的には「鷗川立つは鷗飼をすること」(集成)ということになるだろう。

それで三八「鷗川乎立」は「鷗川を立ち」「上の瀬で鷗飼を催し」(集成)となっている。〈ウカハヲタテ〉とはよまれていない。

潜鷗歌一首 并短歌

四一五八 ……鷗八頭可頭氣低 (ウヤツカヅケテ)

贈水鳥越前判官大伴宿祢池主歌一首 并短歌

四一八九 ……早瑞尔水鳥乎潜都追 (ウヲカヅケツツ)

などの表現がある。

また、山部赤人の歌に、

一〇〇一 大夫は御獵に立たしをとめらは赤裳裾引く清き浜辺を

という歌があり、井村哲夫氏は四十六回万葉学会の講演会で、この歌は、

マ斯拉ヲは御獵をなさつており

オトメらは赤裳を裾引いている

「――なんとまあ清らかな、この浜辺でサ。

という構図で、この〈御獵〉は「騎射・飾騎」であろうとされる。

即ち「騎射をなさつており」であり、「立たす（立つ）」はなさる・催すことになる。

九二六 ……朝獵に鹿猪踏み起し、夕狩に鳥踏み立て 馬並めて御獵ぞ立たす 春の茂野に
とある「御獵ぞ立たす」は「狩をなさる」と訳していいだろう。

「御獵に立たし」は「騎射に出席（参加）」し、「御獵ぞ立たす」は「狩をなさる」という共に四段動詞であろう。

一九三五 春去者先鳴鳥乃鶯之事先立之君乎之將待

『講談社文庫』言先立てし

『角川文庫』言先立ちし

「鶯の言先立ちし」の場合は、〈うぐいすが〉（主語）―言を先立つ（述語）という形からの修辭であり、〈寝を先立〉に似ているかも知れない。

『集成』言先立ちし。まずはじめに言葉をかけられた。

古事記に、

先言「阿那迹夜志 愛袁登古袁」とあるのを西宮氏は「マツ」とよんでいる。

兼 コトアケシテ

延 先ツ言ハク

訓 マツ――トノリタマヒ

校 サキニコトアゲシ玉ハク

先 さきに――と言ひ

朝 先にこととはく

と挙げて「サキニは時や場所に関して過去や前の方を言い、マツは順序の前後（後はノチニ）を言う」と説明されている。したがって「女人先言 不良」（また汝兄先儼―汝弟先儼など）については、「マツイヘルハ」という風である。従来の例は、

果 コトサイタツサカナシ

寛 コトヲサイタツヨカラス

訓 コトサキタチテフサハス

角 さきだち言へるはふさはず

岩 さきに言へるはよからず

朝 先にこととへるはふさはず

桜 マツイヘルハよカラズ（初版）

思 先づ言へるはさがなし

といったように〈コトサキダツ〉が多かった。似たものに万葉集一九三五「事先立」がある。〈コトサキダツ〉と訓めば、単に時間での先の方を示すことになるが、それが儀礼や慣習に含まれば自ら、順序にもなるだろう。

四

〈順序〉といえば、

三三三八 筑波嶺の嶺ろに霞居過ぎかてに息づく君を率寝て遣らさね

などは「マツ寝て帰してやりなさいよ」かも知れない。第三者から前後をつけている。

「移乎佐岐太多尼」では「まず共寝しようよ」〈寝ること、そいつを先立てよう〉と相手に言っている。「先立」を人間が順序として構成しているわけである。

「移乎佐岐太多尼」を「イモⅡ妹 先立たね」と考えたことがなかったわけではない。

略| イモサキタタニ

古| イモサキタタネ

『略解』さていせ人稻掛大平が説に移乎は伊毛の誤なるべしといへり、かくてはいとおだやかにきこゆ、というに對し、

『疎』もし、「妹さき立たね」であると、調子の上の屈折があまりに激しくて、不安になる嫌ひがある。として、『口訳万葉集』では「寝を先立たに」とする。

『万葉東歌』妹では、上に「汝を」とあるのに對して、おだやかでない。とある。

三一二 妹之使曾先尔来（先だちにける）

靈異記中二 佐岐多知踏める

仏足石歌 大夫の進み佐岐多智踏める

と「人事」に於ては「先に立つ」である。

イモは東歌に、

伊毛
3354
3357
3362
3376
3389
3423
3439
3446
3474
3479
3480
3486
3488
3489
3527
3542
3554
3566

（和伎毛）

3567
3577

伊母 3356
3481
3510
3519
(和伎母) 3528
3531
3538

と出ている。この表記は万葉集では一般的といっている。

だから「移乎佐岐太多尼」を〈妹先立たね〉とするのは一見無理のようである。ただ「移母」という表記は先にみた。〈妹が先立つ〉＋希求〈ネ〉である。

〈先立つ〉は前に、「ある事を他の事よりも先にする意。」という全集の注をあげておいたが、先に立つ、先頭に立つという意もあるであろう。全集では続けて、「ネは希求。話し手と相手とが共同して事を行なう場合は一般に願望のナを用いるが、共寝には命令ないし希求の形をとる。」という。

東歌にみられる「ネ」と「ナ」

三三六四 引かば寄り来ネ

三三七八 我にな絶えそネ

三三八〇 言な絶えそネ

三三八八 率寝てやらさネ

三三八九 袖は振りてナ

三三九八 言な絶えそネ

三四一六 吾をな絶えそネ

三四二一 雷な鳴りそネ

三四二六 紐結ばさネ

三四二八 寝処な去りそネ

三四三二 我をかづさネも

三四三九 水をたまへナ

三四四四 背なと摘まさネ

三四五四 つま寄しこせネ

三四六七 入り来て寝さネ

三四九六 いで吾は行かナ

三五一四 君に着きなナ

三五二六 なよ思はりそネ

(三五五七 忘れは為なナ)

三五七五 な咲き出でそネ

と、東歌のネ(希求)はおよそ形式的、尊敬的である。即ち集団性、一般的である。

「妹先立たね」(妹||あなたが先立つて行つてほしい)として、これがどんな所に位置するかを考えてみると、

「ナ——ソネ」という形式が多いのはそれとして、

「率寝てやらサネ」

「紐結ばサネ」

「背なと摘まサネ」

「入り来て寝サネ」

は敬意表現である。

「雷な鳴りそネ」は雷に対して、

「つま寄しこせネ」は麻手小衾に対して、

「な咲き出でそネ」はかほが花に対して、

いわば人間以外の相手に希っている。

こんなところから希求の「ネ」は一回的な事実を表現させようとしているのではないだろう。(あなたが先立って行つて下さい)という儀礼的表現、いわば挨拶的な歌であろう。

場面としては「汝を立てて行きつましじ」だから妹は立ち残る形である。

三五六七 置きて行かば妹はまかなし持ちて行く梓の弓の弓束にもがも

三五六八 後れ居て恋ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを

と同じ状態で、(一緒に行こう)と誘っている送別儀礼の歌の位置にある。

五

「汝を立てて……妹先立たね」という二段構造風なものがあるかどうかというと、

三三四〇 この川に朝葉洗ふ児―汝も吾も

三三四四 庭に立つ麻手小衾―麻手小衾

など少例は見られる。

一七四一 ……己が心から―おそやこの君

一七四四 ……鴨ぞ翼霧る―おのが尾に

一九四一 ……呼ぶ子鳥―鳴きや汝が来る

二一六五 ……かはず妻呼ぶ―妻まかむとか

二七二二 吾妹子が笠の借手の和鬘野にわれは入りぬと妹に告げこそ

三八一三 我が背子が袖返す夜の夢ならしまことも君に逢ひたるごとし

二九〇八 おほろかに我れし思はば人妻にありといふ妹に恋ひつつあらめや

三〇一一 我妹子に衣春日の宜寸川よしもあらぬが妹が目を見む

三一一五 息の緒に我が息づきし妹すらを人妻なりと聞けば悲しも

この辺、少し様子が変わってきているが、同一対象が二様に表現されている点では似た構造である。長歌になると、三二八 我が背子は待てぞ来まさず……今更に君来さめや……うつつには君には逢はず……と繰り返されることもある。

で「汝を立てて」―「行きかつまじ」―「妹先立たね」という送別儀礼的表現は、防人歌に、

四四二九 廐なる縄絶つ駒の後るがへ妹が言ひしを置きて悲しも

四三四七 家にして恋ひつつあらずは汝が佩ける太刀になりても斎ひてしかも

とするような表現を基にしているのである。送別歌は〈置く〉〈残る〉〈後れる〉などを基本語にしている。

四三二五 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ

四三二七 我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く吾は見つつ偲はむ

ともよまれている。

ほかの巻では、

一一五 後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ…

五四三 ……わが背子が行きのまにまに追はむとは…

五四五 わが背子跡ふみ求め追ひ行かば…

などは後を追う表現であるが、一緒に来た例に、

五六六 草枕旅行く君を愛しみ副ひてそ来し

とある。すべて送別儀礼の表現である。

卷十二

三一九二 梓弓末は知らねど愛しみ君に副ひて山道越え来ぬ

は右の五六六の歌と同趣の歌である。

悲別歌の最後の歌は、

三二一〇 あしひきの片山雉立ちゆかむ君におくれてうつしけめやも

は東歌の、

三三七五 武蔵野の小岫が雉立ち別れ去にし宵より背ろに逢はなふよ

に似ている。次の問答歌、

三二一一 玉の緒のうつし心や八十楫かけ漕ぎ出む船におくれて居らむ

三二一二 八十楫かけ島隠りなば吾妹子が留れと振らむ袖見えじかも

とつながっているように思われる。三二二一と三二一二の問答のように三二一〇も用いられたかも知れない。「君に

おくれてうつしけめやも」「玉の緒のうつし心や…おかれて居らむ」は共に行くという気持をいつている。

三二一五 白梶の袖の別れを難みして荒津の浜に屋取りするかも

三二一六 草枕旅行く君を荒津まで送りそ来ぬる飽き足らねこそ

というのは途中まで女が送りに来ている。

右の「問答（歌）」という項目は送別儀礼の一つの定形であろう。

女は「おくるがへ」と表現し、「荒津まで送り」来ることもあった。送りには限度があるから、送り手が先に立つわけであろう。

妹が先に出発し、男が後から行くという〈順序〉に把握すれば「マツ」―「ノチニ」という表現になるのかも知れない。

万葉集に「マツ」は、

四四九〇 あらたまの年行き反り春立たば末豆我がやどにうぐひすは鳴け

四一八二 ほととぎす飼ひ通らせば今年経て来向う夏は麻豆鳴きなむを

四四六三 ほととぎす麻豆鳴く朝明いかにせば我が門過ぎじ語り継ぐまで

八一八 春去れば麻豆咲くやどの梅の花ひとり見つや春日暮らせむ

一六五三 今のごと心を常に思へらば先咲く花の地に落ちめやも

一八九五 春されば先三枝の幸くあらば後にも逢はむな恋ひそ我妹

一九三五 春されば先鳴く鳥のうぐひすの言先立ちし君をし待たむ

二三二六 梅の花先咲く枝も手折りてばつと名付けてよそへてむかも

とあって、主として季節的なものの順序を示し、人間での場合はみられない。一つだけ先掲の、一九三五 春されば先鳴く鳥のうぐひすの言先立ちし君をし待たむ

の場合に、「先鳴鳥乃」（鶯の）「事先立之」、序詞十人事の形がみられる。

鶯が「春されば先鳴く鳥」であって、それが主語で、「事先立之」といっていることは判る。だからそれは（先に言つた）ということである。いわば季節（鳥）が人事に掛けられている。

だから遂に人事では「先立」は自然よりはもっと複雑、混乱してしまっていて、〈順序〉よりは、〈気持〉（意志的なもの）になつていたのではないか。人の場合は何かを先立てることができたという風に。

お前を残しては行けそうにもない。（この私の行く道を）先立つて行つてください、ということができたのではないか。

六

「移乎」（イヲ）を「移毛」（イモ）とするような国語学的根拠というのは難しい。そんな理論は直観性を霧散させる。

三四一八 上毛野佐野田の苗の武良奈倍尔事は定めつ今は如何にせも

この「ムラナへ」は、

群苗

群苗十うらない

うらなへ（うらなひ）の訛

のような幅が与えられている。Muらなへの中にuらないが含まれている。そしてuはOとしばしば交換する。

三四八〇 欲太知伎努可母

四三二一 阿須由利也：伊牟奈之尔志豆

四三二七 伊豆麻母加

四三四一 由伎加豆努加毛

四三五四 和須例勢努加毛

Muはuを含み、uはoを含み、oはWoを含めるとしたら、逆にWoはMoを含めるかも知れない。

「あらたまの伎倍の林に汝を立てて」の〈林〉というのは送別儀礼の目安だったのではないか。暫く歩いて来て振り返っても、そこは見えている。

三三六三 我が背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か

という歌があり、防人歌に、

四三七五 松の木の竝みたる見れば家人の我を見送ると立たりしところ

と詠まれている。

一九 へそがたの林のさきの狭野榛の衣に着くなす目につくわが背

という歌には〈林のさき〉に見送っていた人が含まれているのではないか。

で、上三句を送別儀礼の典型的背景と見る。そこに〈汝を残して、行きかつましじ〉である。〈妹よ、先に立って行つてくさい〉。